

**国立大学法人神戸大学
大学教育推進機構**

**人間形成と思想教育部会
外部評価報告書**

平成 29 年 3 月

はじめに

人間形成と思想教育部会は、哲学・心理学・教育学を学問的基礎として、1 機構・5 研究科 42 人から構成され、「哲学」、「倫理学」、「論理学」、「心理学 A」、「心理学 B」、「教育学 A」、「教育学 B」、「科学技術と倫理」、「教育と人間形成」、「心と行動」の 10 科目を担当している。これらの科目は、高等学校までで触れる機会の少ない分野である一方、基礎的な教養の獲得及び人間性の育成という意味で、その専門分野によらず大学生にぜひ身につけてほしい内容を含んでいる。

本部会は平成 24 年度に外部評価を行い、改善が必要な課題を指摘されてから 3 年が経過した。その間に Semester 制度から Quarter 制度への全学的移行があり、本部会でも開講科目の見直し、再編を進めてきた。今回の外部評価を契機に、Quarter 制度への移行に伴い行った開講科目の再編の点検をし、さらなる授業の改善につとめていきたいと考えている。外部評価委員をお引き受けいただいた京都女子大学現代社会学部・霜田求教授、甲子園短期大学学長・瀧上凱令先生、帝塚山学院大学人間科学部・久保富三夫教授には、機構なご意見やアドバイスを頂戴し、厚くお礼申し上げます。

人間形成と思想教育部会

部会長 大坪 庸介

幹事 齊藤 誠一

幹事 松本絵理子

目 次

I 外部評価委員会

日時・場所・スケジュール・出席者

II 外部評価に関わる資料

1. 神戸大学の教育目的・目標
2. 神戸大学の全学共通教育の目的・目標
3. 授業の実態
4. 自己評価

III 外部評価委員からの講評

霜田求委員による講評

瀧上凱令委員による講評

久保富三夫委員による講評

IV 総括

I

平成 28 年度 神戸大学大学教育推進機構全学共通教育

「人間形成と思想」教育部会 外部評価委員会

日 時 2017 年 2 月 7 日（火） 午後 1 時～午後 3 時

場 所 神戸大学鶴甲第 1 キャンパス N402 中会議室

【実施スケジュール】

- (1) 開会挨拶（藤田 誠一 神戸大学理事（教育担当））
- (2) 委員・出席者紹介
- (3) 外部評価資料の説明（神戸大学教育部会）
質疑応答
- (4) 外部評価委員の先生からの講評と意見交換
- (5) 閉会挨拶

【出席者】

外部評価委員

久保富三夫 帝塚山学院大学 教授
霜田 求 京都女子大学現代社会学部 教授
瀧上 凱令 甲子園短期大学 学長

外部評価実施委員（教育部会構成員）

齊藤 誠一 人間発達環境学研究科 准教授（心理学分野）（部会幹事）
近田 政博 大学教育推進機構 教授（教育学分野）
船寄 俊雄 人間発達環境学研究科 教授（教育学分野）
松本絵理子 国際文化学研究科 教授（心理学分野）（部会幹事）
大坪 庸介 人文学研究科 准教授（心理学分野）（部会長）

陪席者

藤田 誠一 神戸大学理事（教育担当）・大学教育推進機構長
大野 隆 副学長（共通教育担当）・大学教育推進機構国際教養教育院長
加藤 雅之 大学教育推進機構国際教養教育院評価・FD 専門委員会委員長

II

外部評価に関わる資料

目 次

1. 神戸大学の教育目的・目標
教育憲章
2. 神戸大学の全学共通教育の目的・目標
 - (1) 教養教育の目標・目的
 - (2) 全学共通授業科目の学修目標
 - (3) 人間形成と思想部会の位置づけ
 - 1) 担当授業科目
 - 2) 実施体制（教員組織）
3. 授業の実態
 - (1) 開講・履修状況（H27年度・H28年度前期第1・第2クォーター）
 - (2) 授業の概要（クォーター制度でのシラバス）
 - (3) 成績評価
 - (4) 授業評価にかかわる事項
 - 1) ピアレビュー
 - 2) ベストティーチャー賞
 - 3) 学生による評価
4. 自己評価
 - (1) 評価項目に基づく自己評価
 - A 授業の到達目標とそれに対応した教育内容について
 - B 部会の組織構成と運営体制
 - C 教育内容及び方法
 - D 当該教育部会の教育活動による学習成果
 - E 人間形成と思想部会の教育活動に関わる施設・設備及び学生支援
 - F 人間形成と思想部会の教育の質の改善・向上
 - (2) 前回の外部評価で課題となった事項について
 1. 少人数教育の導入
 2. 各授業の到達目標の可視化と評価システムの構築
 3. ピアレビューの成果を各教員にフィードバックしていく仕組みの構築
 4. 不必要な重複履修の低減
 5. 学生の自習時間の確保

1. 神戸大学の教育目的・目標

神戸大学は、開放的で国際性に富む固有の文化の下、「真摯・自由・協同」の精神を発揮し、人類社会に貢献するため、普遍的価値を有する「知」を創造するとともに、人間性豊かな指導的人材を育成します。

教育憲章

(平成 14 年 5 月 16 日制定)

神戸大学は、国が設置した高等教育機関として、その固有の使命と社会的・歴史的・地域的役割を認識し、国民から負託された責務を遂行するために、ここに神戸大学教育憲章を定める。

(教育理念)

1 神戸大学は、学問の発展、人類の幸福、地球環境の保全及び世界の平和に貢献するために、学部及び大学院で国際的に卓越した教育を提供することを基本理念とする。

(教育原理)

2 神戸大学は、学生が個人的及び社会的目標の実現に向けて、その潜在能力を最大限に発揮できるよう、学生の自主性及び自律性を尊重し、個性と多様性を重視した教育を行うことを基本原理とする。

(教育目的)

3 神戸大学は、教育理念と教育原理に基づき、国際都市のもつ開放的な地域の特性を活かしながら、次のような教育を行う。

- (1) 人間性の教育: 高い倫理性を有し、知性、理性及び感性の調和した教養豊かな人間の育成
- (2) 創造性の教育: 伝統的な思考や方法を批判的に継承しつつ、自ら課題を設定し、創造的に解決できる能力を身につけた人間の育成
- (3) 国際性の教育: 多様な価値観を尊重し、異文化に対する深い理解力を有し、コミュニケーション能力に優れた人間の育成
- (4) 専門性の教育: それぞれの職業や学問分野において指導的役割を担うことのできる、深い学識と高度な専門技能を備えた人間の育成

(教育体制)

4 神戸大学は、教育理念と教育原理に基づき、その教育目的を達成するために、全学的な責任体制の下で学部及び大学院の教育を行う。

(教育評価)

5 神戸大学は、教育理念と教育原理が実現され、教育目的が達成されているかどうかを不断に点検・評価し、その改善に努める。

2. 神戸大学の全学共通教育の目的・目標

(1) 教養教育の目標・目的

神戸大学は、「学理と実際の調和」という開学以来の教育方針の下、教育憲章に示された「人間性」「創造性」「国際性」「専門性」を高める教育を実施するとともに、各学部がグローバル化に対応した様々な教育プログラムを開発してきた。このようなプログラムに参加する学生だけではなく、全ての学生を、自ら地球的課題を発見しその解決にリーダーシップを発揮できる人材へと育成することが学士課程の課題である。

そこで、全学部学生を対象とする教養教育において、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき共通の能力を「**神戸スタンダード**」として明示し、その修得を教育目標とする。

神戸スタンダード

●複眼的に思考する能力

専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものの見方を身につける

●多様性と地球的課題を理解する能力

多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を理解する能力を身につける

●協働して実践する能力

専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え目標を追求し続ける力を身につける

(2) 全学共通授業科目の学修目標

基礎教養科目	<p>基礎教養科目は、人文系、社会科学系、生命科学系、自然科学系の4つの分野の科目より開講している科目から、自分が所属する専門分野以外の主要な学問分野について基本的な知識及び「ものの見方」を学び、理解することを目的とし、以下の区分毎に学修目標を定める。</p> <p>人文系</p> <p>人文系としては「哲学」、「論理学」、「倫理学」、「心理学」、「教育学」を開講する。「哲学」は人間の知的営みの蓄積であり、受講者には自身の専門領域がいかに古代から現代にいたる思想に依拠しているかを理解することが求められる。「論理学」は、あらゆる分野で必要とされる推論、論証の基礎に関わる学問であり、受講者には自身の専門分野でも活用可能な論理的思考能力を身につけることが求められる。「倫理学」では、実社会でも通用する高い倫理観を身につけることが求められる。「心理学」は心のはたらきに関する実証的な研究を行うとともに、心の発達を明らかにし、さまざまな発達段階での心の問題の解決を支援する分野である。「心理学」の受講者には、人間の心のはたらきについてその応用可能性を含めた理解をすることが求められる。「教育学」では、知性・技能・情意等の授受という営みについての基本的理解と、教育行為が現代においてはたす意義について理解することが求められる。</p>
--------	--

社会科学系

自己の属する様々なレベルの〈社会〉に対する、科学的かつ複眼的思考と理解とを養うことを目的として、「法学」、「政治学」、「経済学」、「社会学」、「地理学」を開講する。「法学」では複雑化する現代社会において主体的市民として生きるための法学の知識・方法・理論を学ぶ。「政治学」では能動的な政治的主体に求められる、政治を知りそれを生きる知識・理論・方法を学ぶ。「経済学」では、ミクロ・マクロの様々な経済問題を理解するのに必要な基本的概念や分析枠組の習得を目指す。「社会学」では、領域横断的かつ相対的な社会学のものの見方とその有用性を示す。「地理学」においては、その基本概念や発展動向を踏まえ、その実証的・理論的両側面を学ぶ。

生命科学系

全ての生物にとってかけがえのない〈命〉は、今日の進歩した生命科学技術の下、そのメカニズムが新たに解明される一方で、病気などはまだ不明な部分も多い。本分野では、生命に対する複眼的思考を養うことを目的として、人類を初め地球環境に暮らす多様な生命体の仕組みと、我々が生きていく上で必要な健康管理まで、基礎から臨床医学までを学ぶ。「生物学」では、生物の多様性、遺伝子、細胞の構造から機能まで、生物に関する基本的な知識や考え方を学ぶ。「医学」では、主要な病気の早期発見や早期治療ができるように、医学に関する基本的な知識や考え方を学ぶ。「保健学」では、感染症の予防など、体調を管理して病気を防ぐことができるように、保健学に関する基本的な知識や考え方を学ぶ。「健康科学」では、健康な生活を過ごすために必要な生活習慣を身につけることができるように、健康科学に関する基本的な知識や考え方を学ぶ。

自然科学系

高度に科学技術の発達した現代社会に対応する複眼的思考を養うことを目的として、本分野では、我々を取り巻く自然現象や社会現象が我々にどのように関わりを持つかについて、自然科学の観点と切り口から学ぶ。「数学」では、数理的思考における基本的な知識や考え方を学ぶ。「物理学」では、19世紀までに確立された古典物理学、あるいは、20世紀に構築された現代物理学の基本的な知識や考え方を学ぶ。「化学」では、分子にまつわる微視的な内容に関して、あるいは、物質の性質など化学の基本的な知識や考え方を学ぶ。「惑星学」では、惑星および諸天体、宇宙における地球、あるいは、惑星の姿や変動現象について、惑星学の基本的な知識や考え方を学ぶ。「情報学」では、コンピュータやスマートフォンなど、これらの身近な機器に利用されている情報技術の歴史や仕組み、最近の活用事例を知り、基礎知識を学ぶ。

総合教養科目

総合教養科目は、多文化に対する理解を深め、多分野にまたがる課題を考え、対話型の講義を取り入れるなどの工夫により、複眼的なものの見方、課題発見力を養成することを目的とし、以下の区分毎に学修目標を定める。

(1)多文化理解

グローバル化の進展に伴い、現代では異文化間の交流が一層深化し、同時に、異文化に対する理解不足が深刻な不和を招来しかねない状況が現出している。

この科目群では、こうした現代世界の状況を的確に把握するとともに、多文化共生のあり方を模索するのに必要な知識を獲得し、思考力を養成することを目標とする。

より具体的には、多様な時代と地域の、歴史、社会構造、伝統、宗教、芸術を扱い、これらを通じて異文化に関する知識を獲得するとともに、比較文化的観点から分析することにより、異文化との共生につながる多元的な思考力を養う。

(2)自然界の成り立ち

私達を取り巻く自然界には様々な現象が存在し、日々変化している。これら自然界の様々な事象を、私達は体験を通して、関わりを持ちつつ理解している。しかし、多くが未解明であり、今後の研究の進展に負う面も大きい。従って、自然界の様々な事象を理解し解明していくためには、私達が自然愛を持って能動的に対応し、自然界を良く理解することが重要である。

この科目群では、私達の身近な現象として触れることの多い事象、例えば、科学技術と倫理の問題、現代物理学が描く世界像や身近な物理法則、自然界に見られるカタチにまつわる諸問題、ものづくりと科学技術における工学的な技術や将来展望、生命科学として身体の構造と機能の関係、生物資源と農業の今日までの関わりとその特徴、さらには昆虫や微生物との相関、などを取り上げ、私達の日常の問題として理解し、生活の中に取り込んで修得することを目標とする。

(3)グローバルイシュー

社会のグローバル化にともない、わたしたちは、国や地域の境界を越えて地球規模での解決が必要なさまざまな課題に直面している。この科目群では、これらの課題について理解を深め、その解決に指導的役割を果たす人材となるための基礎能力を身につけることを目標とする。

環境問題は、いうまでもなく地球規模の問題であり、自然科学と人文・社会科学の双方から幅広く接近する必要がある。また、人権、ジェンダー、政治や法制度、経済、ビジネスなど、わたしたちの生活に直結する問題領域も、いまや一国だけでは対処することが困難であり、地球規模の視点から取り組んでいくことが求められている。さらに、エネルギー資源・エネルギー技術や発電技術、都市安全技術などの科学技術の応用の考え方や社会における応用の実例についても、地球規模の視点から捉えることで最先端の技術動向を把握することが可能となる。

	<p>(4)ESD</p> <p>この科目群では、〈地球〉を枠組みとした新しい教育運動であるESD（持続可能な開発のための教育）の本質と方法的な特徴を理解し、経済・社会システムの変更や人間のライフスタイルの変化を引き起こすために、われわれが、何を考え、何を变えなければいけないのかを考究する。個人主義的な教育観から小集団・構築主義的な教育観への変更、単一専門性幻想から共同的専門性へのパラダイムの転換など、これまでの常識をくつがえすための方法論を探究してゆく。学生・教員・学外者が、社会的活動やフィールドワークでの協働作業を通して、実践現場にふれながら、新しい動きとしてのESDに〈タッチ〉することが目標である。</p> <p>(5)キャリア科目</p> <p>現在、大学生には就職活動を始めるときに初めてキャリアについて考えるのではなく、入学時から卒業後・修了後のキャリアについて考え、深めていくことが求められている。この科目群では、実社会でのボランティアを通じて、あるいは実社会で活躍するOB/OG等社会人の講演を通じて、自己のキャリアに関して、またキャリアとは何かという問いそのものに関して考え、深めていくきっかけを掴み、将来に向けて備える能力を高めることを目標とする。</p> <p>(6)神戸学</p> <p>この科目群では、我々の神戸大学が立地する神戸市・兵庫県、瀬戸内海等の歴史と現状に関する理解を深める、あるいは神戸大学そのものに関する理解を深めることを通じて、これからの学生生活を過ごすことになるキャンパス、地域についての理解と関心を深め、学生生活をより有意義にするとともに地域社会と大学とのかかわりについて理解することを目標とする。</p>
<p>外国語科目</p>	<p>○外国語第 I</p> <p>グローバル社会の主要な共通言語（リング・フランカ）となっている英語について、その運用能力を向上させるとともに、国際コミュニケーションを成り立たせている諸要素への理解を深めることを目標とする。開設科目のうち、English Communication と English Literacy では、それぞれ、聞く力と話す力、読む力と書く力を中心として、英語力の総合的向上を目指す。Autonomous English では、コンピュータを利用し、英語の基盤能力の拡充と、自律的学習態度の向上を目指す。Productive English では、調査・発表活動の実践を通し、英語の発表能力の拡充と、問題発見能力および問題解決能力の向上を目指す。（これら必修科目の配当は学部により異なる。）また、Advanced English では、各自のニーズに応じた各種の英語技能の向上を目指す。</p> <p>○外国語第 II</p> <p>グローバル化があらゆる分野にまで浸透し、人びとを取り巻く多文化状況が日常化してきた今日、英語プラスもう一つの外国語の基礎的な学力と教養を身に付けることが必要である。そこでドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語のうち、一つの語学を選</p>

	<p>扱し、1年次では、発音・文法・語彙・文章表現などの初級レベルの基礎的修得を目指す。2年次では、より高度な文法事項の理解や読解力・表現力などの中級レベルの修得を目指す。3年次では、多様なトレーニングを通して、社会・文化背景などの知識を身につけながら、実践的な運用能力をさらに向上させることを目指す。</p>
<p>情報科目</p>	<p>コンピュータなどの情報機器とネットワークにおけるコミュニケーションが必須とされる高度情報化社会において、学生はコミュニケーション技術や情報処理、情報収集・発信技術など有効な情報機器の利用方法を学ばなければならない。また、変化の激しい情報化社会に対応するためにはコンピュータやネットワークに関する普遍的な基礎概念と実践的な知識を同時に理解しておく必要がある。情報科目はコンピュータの操作技術を取得し、情報とその取り扱いに関する正しい判断力を養い、それらを日常生活や社会活動に活用できる能力を身につけることを目指す。</p>
<p>健康・スポーツ科学</p>	<p>健康・スポーツ科学は、身体と健康・運動に関する学問を学際的な視野のもとで総合化した新しい総合人間科学である。健康・スポーツ科学では、講義と実習を通して、身体運動と人体の機能・能力との関わりについての知識、安全で効果的かつ効率のよい身体運動について、及び生涯にわたって健康で豊かな生活を送るための知識と実践能力を修得することを目標とする。</p>
<p>共通専門基礎科目</p>	<p>専門教育を受けるための準備や導入として、複数の学部に通ずる基礎科目を開講している。各学部で行われる専門教育では、専門分野ごとそれぞれの性質に合わせた系統的そして累積的な知識と技術の修得が不可欠である。そこで、共通専門基礎科目では、専門科目を理解し修得するための基礎となる知識や技術を身につけ、基礎的な理論を理解し、学問的なものの見方を養うことを目標とする。</p>

(3) 人間形成と思想部会の位置づけ

本部会は、基礎教養科目の人文系科目を主に担当している。それに加えて、総合教養科目の「教育と人間形成」・「科学技術と倫理」、共通専門基礎科目の「心と行動」を担当している。

1) 担当授業科目

神戸大学は今年度（平成 28 年度）からクォーター制度を導入し、従来のセメスター制度の教育体制を大きく変更した。そのため、ここでは平成 27 年度の担当科目と平成 28 年度の担当科目を紹介し、セメスター制度からクォーター制度への変更点を説明する。

ほぼすべての科目が 1 単位科目となるために、内容がうすくなることが懸念されるが、以下の表からわかるように、もっとも基本的な基礎教養科目は A と B に分ける、または哲学を哲学と倫理学に分けるなどして、学生が両方を履修することで従来のセメスター制度時と同様の内容を学修することができるように配慮している。

・クォーター制度における基礎教養科目（セメスター制度時は教養原論科目）

セメスター制度での担当 (～H27)		クォーター制度での担当 (H28～)		変 更 点
科目名	単位数	科目名	単位数	
哲 学	2	哲 学	1	従来の 15 回の授業を半分にし、1 単位科目とした。
--	--	倫理学	1	新設科目。
論理学	2	論理学	1	従来の 15 回の授業を半分にし、1 単位科目とした。
行為と規範	2	--	--	担当者が部会を異動したため廃止。
心理学	2	心理学 A	1	15 回の授業を半分にし、従来の心理学のうち実験系心理学の内容（知覚、認知、感情、社会等）を扱う科目とした。
		心理学 B	1	15 回の授業を半分にし、従来の心理学のうち特に生涯発達心理学・臨床心理学の内容を扱う科目とした。
心と行動	2	--	--	従来から心理学との内容の差異化が十分に図られていないとされていたため廃止。
教育学	2	教育学 A	1	15 回の授業を半分にし、従来の教育学のうち基礎的な内容を扱う科目とした。
		教育学 B	1	15 回の授業を半分にし、従来の教育学のうち教育に関する国際比較を扱う科目とした。

・クォーター制度における総合教養科目（ Semester制度時は教養原論科目）

Semester制度での担当 （～H27）		クォーター制度での担当 （H28～）		変更点
科目名	単位数	科目名	単位数	
教育と人間形成	2	教育と人間形成	1	従来の 15 回の授業を半分にし、1 単位科目とした。
科学技術と倫理	2	科学技術と倫理	1	従来の 15 回の授業を半分にし、1 単位科目とした。

・専門教養基礎科目

Semester制度での担当 （～H27）		クォーター制度での担当 （H28～）		変更点
科目名	単位数	科目名	単位数	
心理学 S*	2	心理学 S1	1	従来の 15 回の授業を S1・S2 に分割し、実質的に変更していない。 平成 28 年度まで開講。平成 29 年度以降廃止。
		心理学 S2	1	
論理学 S*	2	論理学 S1	1	従来の 15 回の授業を S1・S2 に分割し、実質的に変更していない。 平成 28 年度まで開講。平成 29 年度以降廃止。
		論理学 S2	1	
--	--	心と行動	2	医学部医学科のカリキュラム変更に伴い、医学部医学科の学生のみを対象とした科目として新設。 第 1 クォーターに 2 コマ連続で開講することで 15 回・2 単位科目としている。

*心理学 S、論理学 S は経済学部・経営学部の学生を対象として開講し、経済学部・経営学部の学生は教養原論の心理学、論理学を履修しないように指導していた。しかし、経済学部・経営学部が基礎教養科目の論理学及び心理学 A・B を学生に履修させることで同等の内容が学修可能と判断したため、平成 28 年度の開講をもって廃止が決まっている。

2) 実施体制（教員組織）

人間形成と思想部会に所属する教員は1機構・5研究科に及び、キャンパスも5つにまたがっている。機構および研究科ごとに、教員の専門領域に応じた担当授業配分がなされており、当該部局のルールによって授業担当者を決め、全体的な調整は部会長（1名）、幹事（2名）がとりまとめをしている。クォーター制度移行後の具体的な所属内訳と担当授業は以下の通りである。

大学教育推進機構	3名	(心理学A, 教育学B, 教育と人間形成)
人文学研究科	10名	(哲学, 倫理学, 論理学, 心理学A, 科学技術と倫理)
人間発達環境学研究科	18名	(心理学B, 心理学S1・S2, 教育学A)
国際文化学研究科	1名	(心理学A, 心理学S1・S2)
保健学研究科	4名	(心と行動)
海事科学研究科	1名	(心理学A)
非常勤講師	5名	(哲学, 倫理学, 論理学, 論理学S1・S2, 科学技術と倫理)

3. 授業の実態

(1) 開講・履修状況（H27年度・H28年度前期第1・第2クォーター）

人間形成と思想部会は、H28年度については哲学（4コマ）、倫理学（4コマ）、論理学（4コマ）、心理学A（12コマ）、心理学B（6コマ）、教育学A（6コマ）、教育学B（3コマ）、教育と人間形成（3コマ）、科学技術と倫理（4コマ）、論理学S1・S2（各2コマ）心理学S1・S2（各2コマ）を開講している。

H27年度（前期・後期）・H28年度（第1・第2クォーター）の履修状況（専門共通基礎科目は除く）は以下の通りである。H27年度前期については、1年生は選択ではなく事前に割当てて登録するために、1年生割当数という欄が存在する。またH28年度の第1クォーターについては、1年生は各学部で導入教育を受けているために履修対象となっていない。

平成27年度前期教養原論1年生指定科目割当者数及び抽選登録結果一覧

曜日	時限	開講科目名 (2006～2015)	主担当教員	当初 定員	1年生 割当数	2年生以上(～2014年度生)			履修者数 (合計)	追加登録	履修者数 (4/10時 点)
						抽選定員	第一希望者数	決定者数			
月	1	心と行動	林敦子	200	112	88	232	88	200	0	200
		哲学	宗像恵	150	70	80	18	80	150	0	150
		論理学	副島猛	200	92	108	47	108	200	0	200
火	1	科学技術と倫理	稲岡大志	100	30	70	8	70	100	0	100
		教育学	渡部昭男	150	54	96	164	96	150	0	150
		行為と規範	澤野美智子	100	40	60	37	60	100	0	100
		心と行動	嶋田博行	200	54	146	97	146	200	0	200
		心理学	喜多伸一	180	97	83	55	83	180	0	180
		論理学	佐々木崇	100	40	60	27	65	105	0	105
木	2	教育と人間形成	近田政博	100	30	70	22	39	69	4	73
		教育学	山口悦司	150	40	110	13	28	68	1	69
		行為と規範	澤野美智子	100	20	80	32	46	66	1	67
		心と行動	鳥居深雪	200	30	170	89	152	182	6	188
		心理学	米谷淳	180	54	126	46	101	155	5	160
		哲学	嘉指信雄	150	30	120	15	26	56	2	58

平成27年度後期 教養原論抽選登録結果等

曜日	時限	開講科目名 2006～2015	主担当教員	教室	定員	第 一 希望者数	当選者数	空き定員	履修者数
月	2	教育学	山下 晃一	K601	150	40	65	85	65
		心と行動	相澤 直樹	K301	150	69	118	32	128
		心理学	松本 絵理子	B110	200	334	200	0	199
		哲学	宗像 恵	K401	150	40	109	41	116
水	1	科学技術と倫理	松田 毅	K202	200	118	149	51	150
		教育と人間形成	近田 政博	B209	180	100	124	56	127
		心と行動	米谷 淳	B110	200	256	200	0	185
		哲学	加藤 憲治	K601	150	48	74	76	78
木	2	教育と人間形成	近田 政博	C401	100	54	100	0	98
		行為と規範	坂井 一成	B209	180	146	180	0	177
		心と行動	坂本 美紀	B109	180	170	180	0	177
		心理学	米谷 淳	C201	100	84	100	0	99

平成28年度前期第1クォーター 基礎教養科目・総合教養科目抽選登録結果

曜日	時限	開講科目名	主担当教員	定員	第 一 希望者数	当選者数	2次抽選 当選者数	3次抽選 当選者数	空き定員	履修者数	学部指定開講枠 対象学部(学年)
月	1	心理学A	米谷 淳	200	373	200	0	0	0	199	工学部(2年生)
		論理学	大塚 淳	100	24	64	5	2	29	71	
		論理学	副島 猛	150	60	85	0	6	59	91	
		倫理学	的場 千佳世	100	19	34	0	1	65	35	
火	1	心理学A	野口 泰基	180	90	100	4	6	70	107	文学部(2年生)
		教育学A	渡部 昭男	200	220	200	0	0	0	196	経済学部(2年生)
		科学技術と倫理	稲岡 大志	100	4	4	3	1	92	6	
水	2	心理学A	喜多 伸一	180	115	162	2	3	13	168	工学部(2年生)
		心理学B	齊藤 誠一	200	323	200	0	0	0	200	
		論理学	佐々木 崇	100	33	37	1	17	45	54	
		教育学A	北野 幸子	180	41	100	1	4	75	103	
木	2	倫理学	茶谷 直人	100	22	35	0	8	57	42	
		教育学B	近田 政博	100	80	80	2	11	7	92	文学部(2年生)

平成28年度第2クォーター 基礎教養科目抽選登録結果一覧

曜日	時限	開講科目名	主担当教員	教室	定員	第 一 希望者数	当選者数	2次抽選当 選者数	3次抽選当 選者数	空き定員	履修者数	学部指定開講枠 対象学部
月	1	心理学A	米谷 淳	B109	170	304	170	0	0	0	170	医学部(1年生)
		論理学	副島 猛	B209	170	148	170	0	0	0	170	海事科学部(1年生)
		倫理学	的場 千佳世	K401	150	24	118	8	24	0	146	
火	1	心理学A	石井 敬子	B109	180	170	180	0	0	0	180	国際文化学部(1年生)
		教育学A	渡部 昭男	B210	200	303	200	0	0	0	199	法学部(1年生)
		科学技術と倫理	稲岡 大志	K601	150	76	124	13	13	0	143	
水	2	心理学A	大坪 庸介	C201	100	112	100	0	0	0	99	理学部(1年生)
		心理学B	齊藤 誠一	B109	180	140	148	5	27	0	176	医学部(1年生)
		論理学	佐々木 崇	K302	100	17	16	12	24	48	40	
		教育学A	山口 悦司	K401	150	118	123	1	26	0	147	
木	2	倫理学	茶谷 直人	B101	100	29	29	4	32	35	65	
		教育と人間形成	近田 政博	B209	180	221	180	0	0	0	162	

H27年度までの Semester 制度のもとでは、人間形成と思想部会が開講する科目は全学部の学生を対象として開講されていた（ただし、経済学部・経営学部の学生のみを対象とした共通専門基礎科目（論理学 S，心理学 S）は除く）。

H28年度のクォーター制度移行に伴い、基礎教養科目は当該科目を専門的に学ぶことのない学生のための科目と位置づけられた。そのため、人間形成と思想部会が担当する科目のうち哲学・心理学 A・心理学 B・倫理学については文学部・国際文化学部・発達科学部（ただし人間環境学科を除く）の学生は履修できない。また、発達科学部（人間環境学科を除く）については、上記 4 科目に加えて論理学・教育学 A・教育学 B も履修することができないこととなっている。国際文化学部・発達科学部にかかわる制約は H29 年度以降は、国際人間科学部の各学科に引き継がれる予定である。

共通専門基礎科目については、論理学 S・心理学 S が H29 年度から廃止されるが、H28 年度に新規に開講された医学部医学科学生を対象とした心と行動は H29 年度以降も継続して開講予定である。H27 年度、H28 年度における論理学 S（もしくは論理学 S1・S2）、心理学 S（心理学 S1・S2）の受講状況は以下の通りである。

H27年度					受講者数		
学期	授業科目	単位数	担当教員	時間割	経済学部	経営学部	合計 ()内は旧課程 の学生数
前期	論理学S	2	副島 猛	月3	188	106	294 (8)
	心理学S	2	松本 絵理子	水3	105	99	204 (2)
後期	後期	2	副島 猛	月3	125	83	208 (2)
	心理学S	2	河崎 佳子	水4	116	125	241 (2)

H28年度・前期					受講者数		
学期	授業科目	単位数	担当教員	時間割	経済学部	経営学部	合計
第1Q	論理学S1	1	副島 猛	月3	174	149	323
第2Q	論理学S2	1	副島 猛	月3	165	144	309
第1Q	心理学S1	1	松本 絵理子	水3	104	104	208
第2Q	心理学S2	1	松本 絵理子	水3	108	103	211

(2) 授業の概要（クォーター制度でのシラバス）

クォーター制度に移行するにあたり、従来、担当者ごとの裁量によっていた各科目のシラバスを統一することとなった。ただし、細かな内容まですべて統一することは無理があるので、基礎教養科目の同一名授業については「授業のテーマと目標」を統一した。以下は、それぞれの科目の「授業のテーマと目標」を示す。

・哲学

【授業のテーマ】哲学的思考とは何か？

【授業の到達目標】私たちが子供の頃、「僕が僕で、君でないのはなぜ？」、「時の始まりはいつ？」、「宇宙の果てはどこ？」等々といった解決のつかない疑問を抱いたことがないだろうか。当時はそれが哲学的な大問題だとも知らずに、そうした疑問は考えても仕方がないもの、無意味なものとして放置され、今は疑問を抱いていたことも忘れてしまっているかもしれない。しかし、こうした問題を考察することは本当に無意味なのだろうか。たとえば、「私とは何か」とか、「時間とは何か」といった問題は普段わかったつもりになっているが、いざこれらの問題に答えようとするとなることができない。実際、これらの「問題」に最終的な解答を出すことは困難であり、できないかもしれない。しかし、これらの「問題」を考察することで、分かりきったもの、当たり前なものだと思い込んでいる日常生活の世界がいかに脆弱なものの上に成り立っているのかに、逆に言えばそのかけがえのなさに気づくことができるのではないだろうか。このような問題意識、そしてそこから得られるこの気づきは、専門の研究にも活かされる思考態度でもあります。この講義では、「授業の概要」に挙げられている哲学の諸問題に対して、哲学的に思考するとはどのようなことかを具体的に提示することで、その思考パターンを理解し、その思考態度を身につけます。

・倫理学

【授業のテーマ】倫理学入門

【授業の到達目標】「倫理学」とは、古典ギリシア語のエートス（人柄）に由来する英語 ethics に相当する日本語であり、哲学の一部門を成す学問である。ただ、古来より現代に至るまで行われてきた倫理的な営みは、それが人間の生について学問的に探究するものであるという共通点を別にすれば、極めて多様な広がりを持っている。本科目では、そのような倫理学が、どのような問題をどのように考察し、そしてどのような立場がそこに見出されるのかについて、受講者に体感してもらうことを目指す。

・論理学

【授業のテーマ】講義と課題を通じて、論証の基本的形式や演繹や帰納などといった種々の推論形式を学ぶことで、論理的にものごとを考えるための力を養う。

【授業の到達目標】正しい推論や論証についての基本的な理解を得ること、与えられた主張の論理的内容を正確に把握できるようになること、それについての的確な批判ができるようになること、などがこの授業の目標である。

・心理学 A

【授業のテーマ】心理学 A では実験心理学を扱う。特に知覚心理学、認知心理学、学習心理学、社会心理学、感情心理学など実験という手法を用いて心のありかたを研究している領域について学ぶ。

【授業の到達目標】心理学 A では実験心理学の基本的な考え方を身につけることを目標とする。実験心理学では、心のはたらきを実験という手法により明らかにしようとする。そこで大事になるのは、実験をどのように設計するかということと、心のはたらきを捉えるためにどのような測定を行うかということである。これについては、具体的な実験の例を知ることによって理解が深まる。そこで、心理学 A では、実験心理学の諸領域を網羅的に概観することはせず、いくつかの代表的な実験事例を通じて実験心理学を学ぶ。

・心理学 B

【授業のテーマ】誕生から死に至るまでの人間発達の特徴を発達心理学の観点から理解し、その発達を支援する働きかけを教育心理学や臨床心理学の観点から学習する。

【授業の到達目標】①人間発達がどのように生じるのかというメカニズムと、各発達段階である胎児期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、中年期、老年期の特徴と意義を理解する。あわせて、発達研究に用いられる実験、観察、調査、事例研究などの研究法を理解し、その研究法によりどのようにして知見が得られたかを知る。②発達の中で生じるつまずき、不適応、精神病理、障害などについて理解を深め、どのような支援があるかを知る。

・教育学 A

【授業のテーマ】本科目では、日本教育史、学習科学、幼児教育、科学教育、教育法制度、教育経営などの観点から教育学に関する基本的な内容を講述する。

【授業の到達目標】教育学に関する基礎的な知見を獲得することを目標とする。

・教育学 B

【授業のテーマ】本授業では、現代の教育問題の本質について国際比較の観点から映像教材やディスカッションを通じて検証する。これにより、教育問題の多面性と複雑性を認識し、それぞれの立場がどのような論理に基づいているかを理解する。対象としては初等教育、中等教育、高等教育などの公教育を扱う。

【授業の到達目標】日本と諸外国における教育問題についての基礎的知識を獲得する。教育問題に関する当事者としての批判的思考力を養う。

(3) 成績評価

神戸大学共通細則より、以下の通り定められている。

○神戸大学共通細則（抜粋）

(成績)

第4条 授業科目の成績は、100点を満点として次の区分により評価し、秀、優、良及び可を合格、不可を不合格とする。

秀（90点以上）

優（80点以上 90点未満）

良（70点以上 80点未満）

可（60点以上 70点未満）

不可（60点未満）

2 秀、優、良、可及び不可の評価基準は、次の各号のとおりとする。

(1) 秀 学修の目標を達成し、特に優れた成果を収めている。

(2) 優 学修の目標を達成し、優れた成果を収めている。

(3) 良 学修の目標を達成し、良好な成果を収めている。

(4) 可 学修の目標を達成している。

(5) 不可 学修の目標を達成していない。

(4) 授業評価にかかわる事項

1) ピアレビュー

人間形成と思想部会では、前回の外部評価以降、平成 25 年度・前期に伊藤俊樹准教授の「心と行動」を対象としたピアレビューを行った。その後、平成 27 年度・前期に石井敬子准教授の「心理学」を対象としたピアレビューを行った。

実施日時：2013 年 6 月 20 日（木）2 限

授業：心と行動（伊藤俊樹 准教授）

参観者数：3 名

ピアレビューの感想として、以下のような内容が挙げられた。

- ・動画や音楽を利用して学生が飽きないような工夫がなされていた。
- ・配布物が教室後方におかれ効率的に配布されていた。
- ・授業開始時と終了時での学生の人数差が大きく、出席管理が課題では。

実施日時：2015 年 6 月 23 日（火）1 限

授業：心理学（石井敬子 准教授）

参観者数：3 名

ピアレビューの感想として、以下のような内容が挙げられた。

- ・映画の話題、映像資料を使って学生の注意をひいている点が良い。
- ・パワーポイントのスライドが見やすく、グラフも理解を促進する。
- ・現実の問題（事件）との関連を説明する点が良い。
- ・学生に配布資料を渡すと学生がむしろちゃんと聞かなくなるのでは。

2) ベストティーチャー賞

人間形成と思想部会では平成 23 年度以降、以下の受賞があった。

H23 後期	山下晃一	人間発達環境学研究科・准教授	教育学
H24 後期	山下晃一	人間発達環境学研究科・准教授	教育学
H25 後期	山下晃一	人間発達環境学研究科・准教授	教育学
H26 前期	林 創	人間発達環境学研究科・准教授	心と行動
H26 後期	近田政博	大学教育推進機構・教授	教育と人間形成
H27 前期	近田政博	大学教育推進機構・教授	教育と人間形成

3) 学生による評価

人間形成と思想部会で提供する科目（共通専門基礎科目を除く）全体についての学生による評価は以下の表のように推移している。教員の熱意については5点満点中ほぼ4点台であり、熱意が伝わっていると考えられる。シラバスの適切さも4点程度であり適切と判断されていると考えられる授業内容の理解も3点後半から4点程度であり、わかりやすい講義が行われていると考えられる。興味・関心の向上については他よりやや低い、それでも平均すれば3.5点以上となっており学生の興味・関心をひく内容となっていると考えられる。また、H27年度後期からアンケートの形式が変更となり、シラバスに記載された到達目標を学生自身がどれくらい達成できたかを評価してもらっている。これは3.7点であり、まずまずの得点と考えられる。

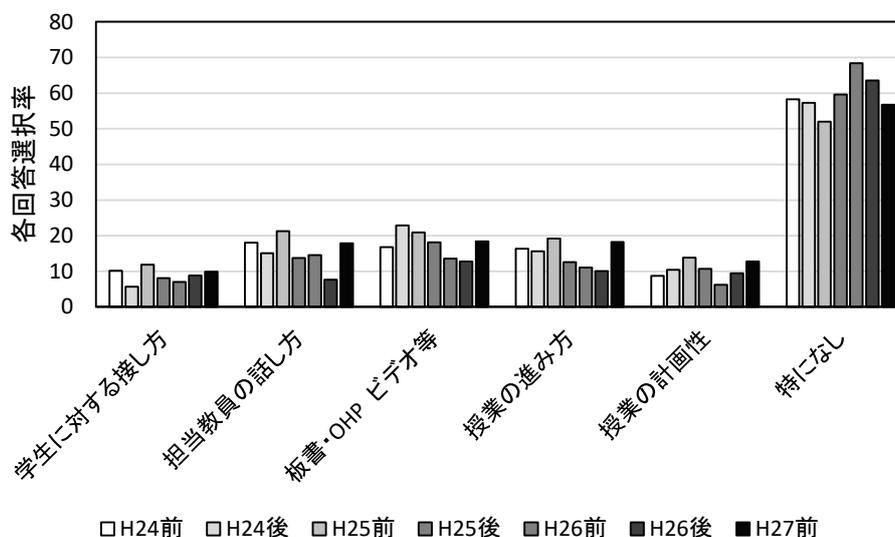
	H24前	H24後	H25前	H25後	H26前	H26後	H27前	H27後
1. 教員の熱意	4.0	4.2	3.9	4.3	4.3	4.5	4.1	--
2. シラバスの適切さ	3.7	4.0	3.6	4.1	4.1	4.2	3.9	--
3. 到達目標の達成度	--	--	--	--	--	--	--	3.7
4. 授業内容の理解	3.5	3.9	3.4	4.0	4.0	4.1	3.7	4.0
5. 興味・関心の向上	3.4	3.7	3.2	4.0	3.9	4.1	3.5	--
6. 総合評価	3.7	3.9	3.5	4.2	4.2	4.3	3.8	4.2

質問項目1、2、4、5：1点＝そう思わない～5＝そう思う

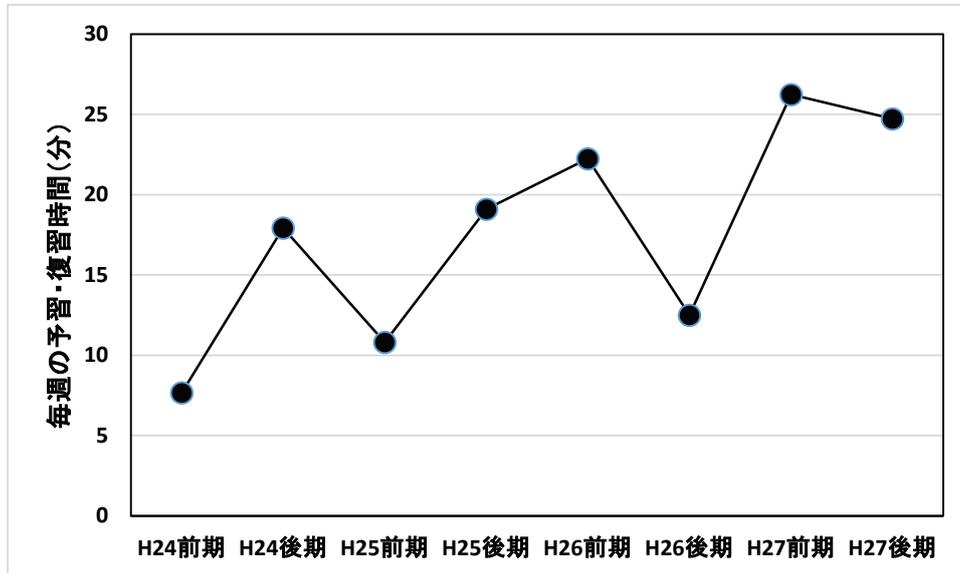
質問項目3：1点＝達成できなかった～5点＝十分に達成できた

質問項目6：1点＝有益でなかった～5点＝有益であった

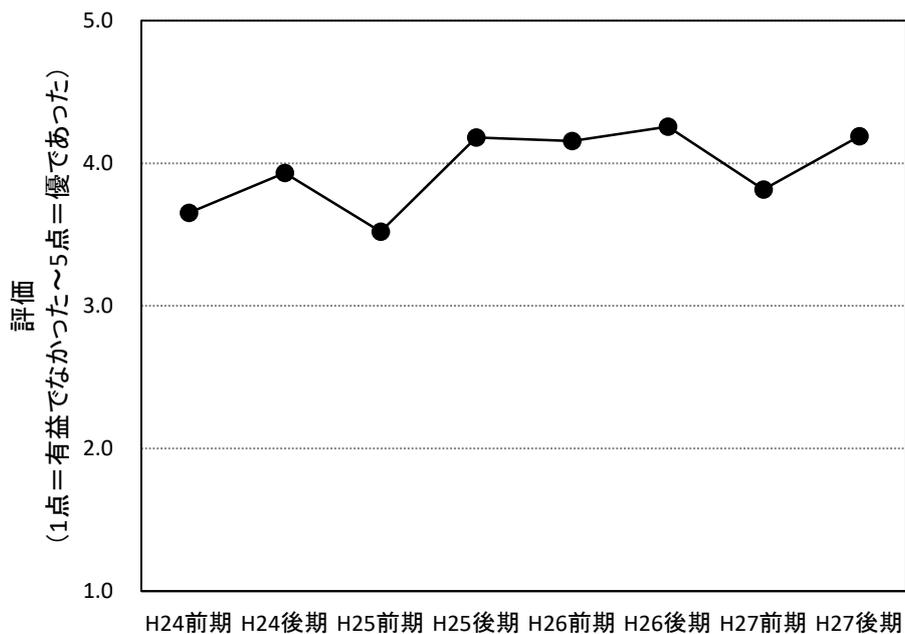
また、学生に改善を希望する内容も複数選択可として尋ねている。その結果、改善が必要とされた項目の割合の推移をグラフにしたのが以下のものである。H24年度前期からH27年度前期にかけてバーの色を濃くしているが、いずれの学期にも改善必要な点を「特になし」とした学生が過半数を超えていることがわかる。



近年、学生の予習・復習時間の確保が必要とされている。授業評価アンケートでは、学生には時間をおおまかな範囲（例えば、「30分～50分」）で示し自身の自習時間を選択してもらっているため、それぞれの範囲の中点を用いておよその平均自習時間を求めた。自習時間の推移は以下のグラフのようになった。絶対的な自習時間としてはまだ向上の余地はあるが、そして年ごとの凹凸はあるが、全体に上昇傾向にあることが見て取れる。



最後に、学生による総合評価の推移をグラフで示すと以下のようになる。多少の凹凸はあるが、概ね3点台後半から4点台を推移しており、人間形成と思想部会が提供する授業は学生から高く評価されていると言える。



4. 自己評価

(1) 評価項目に基づく自己評価

A 授業の到達目標とそれに対応した教育内容について

人間形成と思想部会では、H28 年度より多くの科目を 1 単位科目に変更するにあたり、すべての基礎教養科目（哲学、倫理学、論理学、心理学 A、心理学 B、教育学 A、教育学 B）について、同一タイトルの開講科目のシラバスのテーマ・到達目標を担当者によらず共通にした（3（2）の共通シラバスを参照）。その結果、同一タイトルの授業の内容も統一されたものになった。ただし、全学共通科目という性質上、個々の科目に学部からの要請を反映させることは難しく、いずれも個々の学問分野の導入的な内容となっている。

B 部会の組織構成と運営体制

当部会の組織構成と運営は適切に整備され、機能していると考えられる（2（3）の開講科目、運営体制を参照）。ただし、哲学関連の科目（哲学、倫理学、論理学、科学技術と人間）を担当可能な教員が定年後、後任の補充が各部局で十分に行われていないことがあり、今後は哲学関連教員の不足が問題になる可能性がある。

C 教育内容及び方法

個々の授業の内容については、基礎教養科目では H28 年度から同一タイトルの科目のシラバスの一部を共通とすることにより、担当者によらず到達目標を実現する授業内容になるようにしている。また、共通シラバスにより、適切なシラバス作成と活用が実現されている。

人間形成と思想部会は主に基礎的な科目を担当しているが、「教育と人間形成」・「科学技術と倫理」のように現代的な問題を取りあつかう科目も開講することで、社会からの要請にこたえている。

人間形成と思想部会が担当する科目は大教室での授業が中心であり、演習、実験などは含まない。これは当部会の基本的な目標に照らして妥当な授業配置であると考えられるが、少人数教育への対応は今後の検討事項である。

人間形成と思想部会の多くの授業では、リアクション・ペーパーなどが利用されて、学生のニーズを把握した授業が実施されており、単位の実質化への配慮がなされている。

人間形成と思想部会で提供する授業は大人数の講義形式であるため、特に人数の多い授業に TA を配置し、プリントの配布など授業の円滑な実施のために TA が活用されている。

人間形成と思想部会の担当授業では、これまで基礎学力不足の学生が問題となったことはないが、ハンディキャップをもった学生が履修する場合には事前に担当者に配慮が必要な事情を連絡し、適切な配慮を依頼している。今後、基礎学力不足の学生が目立つことになれば、新たな対応を考えていく必要がある。

成績評価基準は組織として作成され学生に周知されている（3（3）を参照）。人間形成と思想部会の授業でも客観性・厳格性をもった成績評価がなされており、学生から成績評価への不満・不信が報告されたことはない。担当教員の入力ミスなどは学生からの連絡を担当教員に知らせ、各担当教員が適切に対応している。

D 当該教育部会の教育活動による学習成果

学生を対象とした授業評価アンケートの結果及びそれを反映したベストティーチャー賞の受賞が毎年あることから（3（4）を参照）、人間形成と思想部会の授業では適切な学習成果があがっていると考えられる。

E 人間形成と思想部会の教育活動に関わる施設・設備及び学生支援

人間形成と思想部会に限らないが、大学教育推進機構としてコモンルーム×4、ラーニングコモンズ×1を備えており、学生はこれらの施設を利用可能である。

F 人間形成と思想部会の教育の質の改善・向上

人間形成と思想部会では3年に一度のピアレビューを実施し、教育の質の改善に努めている。部会構成員の自身の授業時間との重複などがあり参加者人数が少ない傾向があったが、事後の資料の共有などを通じて適切に対応した。

また、授業評価アンケートの結果にもとづき毎年度末に各部会構成員が自己点検・評価を実施しており、教育の改善・質の向上を図る体制が整っていると考える。

(2) 前回の外部評価で課題となった事項について

1. 少人数教育の導入

人間形成と思想部会の授業に少人数教育を導入する必要性が指摘された。しかし、前回の外部評価以降は全学的なクォーター制度移行に伴うカリキュラム変更が最優先されたため、少人数教育の導入についてはまだ着手できていない状況である。これについては、今後、引き続き検討していくべき事項である。

2. 各授業の到達目標の可視化と評価システムの構築

シラバスに到達目標を明記し、神戸大学としても評価方針を学生に明示的に示している。加えて、H28年度より同一タイトル科目のシラバスのテーマ・到達目標を共通のものにするという改革を行った。これによって、学生からは同一タイトル科目であればいずれのシラバスを見ても同じ到達目標が書かれていることになり、到達目標の可視化が進んだと考えられる。

3. ピアレビューの成果を各教員にフィードバックしていく仕組みの構築

ピアレビューを実施した後は、授業を公開した教員と参加した教員が一同に会し、相互に意見を交換する場を設けている。ただし、授業や業務の都合でこれに参加できない教員との情報共有のシステムを考える必要がある。

4. 不必要な重複履修の低減

以前の科目配置では、「哲学」と「行為と規範」の内容が明確に切り分けられないこと、「心理学」と「心と行動」の内容が明確に切り分けられないことが指摘されていた。H28年度のカリキュラム改正により、「行為と規範」と「心と行動」は廃止された。それに伴い、「哲学」は「哲学」と「倫理学」の2つに分かれることで、それぞれ授業の科目が学問名となり、内容の重複がないように配慮された。心理学については「心理学 A」と「心理学 B」にわけ、シラバスにおいて心理学 A が実験系心理学であるのに対して、心理学 B は生涯発達と臨床系の心理学を含む内容であることがすぐにわかるようになっている。また、このように講義でカバーする範囲を明確にすることにより授業内容の重複はなくなった。

5. 学生の自習時間の確保

授業評価アンケートの結果に見られるように、学生の自習時間については上昇のトレンドにあり、前回の外部評価からの改善がみられる。

III

外部評価委員からの講評

霜田 求 委員

1. シラバスについて

- ・ウェブに公開されているものを見ると、「授業計画」として各回（1単位8回分）の内容が記載されているものとなないものがある。ほとんどの大学では全回記載が必須であり、標準フォーマットになっているのが実態と思われる。文部科学省からの「指導」があると聞いている。とくに教職関連科目の場合は厳格に審査され、不備の場合は書き直しが要求される。
- ・「評価基準」の内訳（授業参加度、レポート、試験など）やそれぞれの比率の記載がないものもある。これも必須と思われる。
- ・上記の点について改善が求められる。

2. 授業形態について

- ・大人数講義でも学生参加型（グループワーク、対話形式）は可能であると考えられるので、今後の取り組みを示す必要がある。

3. 授業評価について

- ・学生による授業評価に対する教員（および組織として）のフィードバックが十分に行われているかが問われる。
- ・教員相互の評価については、可能なかぎり全教員が評価する／されるという体制作りが求められる。

瀧上 凱令 委員

外部評価資料および外部評価委員会における説明・質疑から、教育内容や教育方法等において改善が認められ評価できる。ただし、クォーター制導入直後のため、新カリキュラムの評価は困難なので、2年間あるいは4年間経過後にあらためて検証する必要があると思われる。

1. 単位数が大幅に減っている点について

多くの科目の単位数が、クォーター制の導入により減少している。単位が実質化されれば問題はないかもしれないが、今後適宜評価を行い、問題点があれば改善を行うことが望まれる。

2. 前回の外部評価で課題となった事項について

1) 不必要な重複履修の低減について

クォーター制導入に伴うカリキュラムの改正により、授業内容の重複がなくなったことが認められた。

2) 各授業の到達目標の可視化と評価システムについて

シラバスに到達目標と評価方針を明示するなどの改善が行われている。

3) 少人数教育の導入について

学生数と担当教員数からみて、全学共通教育として少人数教育を行うのは困難なので、多人数教育で教育効果をさらに上げる方法を検討する方が現実的ではないかと思われる。

久保 富三夫 委員

1. 現在の神戸大学卒業生の皆さんの多くは、実際のこととして、将来、社会の各分野においてリーダーとして活躍する人たちだと思います。その意味では、神戸大学の使命は、まさに、グローバルにせよローカルにせよ、「人材」を育てることであると思います。

私は、そのような人材、社会の各分野でリーダーとして活躍する人たちに最も身に付けてほしいことは、社会的に弱い立場にある人たちへの理解や共感する力、思いやる力であると思っています。この点は、私の現代社会に対する見方が反映しているので、皆さんとは見解が異なるかもしれませんが、私はそのように願っています。

その立場から、このたび、「神戸大学の目的・目標」、そして、「教育憲章」の中に明記されている「教育目的」、さらに、「教養教育の目標・目的」を拝見しますと、前述の私の願い、すなわち、「社会的に弱い立場にある人たちへの理解や共感する力、思いやる力を身に付けた人材を育ててほしい」にも通じるどころが多々あり、素晴らしい内容であると思います。

そして、事前にいただいた「外部評価資料」や今日のご説明をお聞きしても、様々に厳しい制約がある中で、とても努力されている様子がわかります。

以下は、以上述べたことを前提としたうえでの改善のご検討をお願いしたいことです。

2. 「外部評価資料」16 頁の上段の表、そして、17 頁下段のグラフから、「「人間形成と思想」教育部会」が担当されている授業について、学生からはおおむね好評である（5 点満点中、平均で 4 点くらいで、年度ごとにほぼ上昇傾向）ということはわかります。そして、「この表やグラフは平均点で示されているが、分布がどのようになっているか（下位の層の塊がないのか）」と私が質問したことに対しては、「そうではない」ということなので安心しました。ただ、この表やグラフでは、学生の変容の具体的な姿がわからないので、少数でよいから、この部会が担当されている授業を通じて、学生の中にどのような変容が起きているのか、を記述することをご検討いただきたいと思います。

3. 「学生による授業評価」の項目として、「自分自身の授業に対する向き合い方はどうだったのか」を振り返らせる項目があってもよいのではないのでしょうか。

4. 「外部評価資料」17 頁上段のグラフと 19 頁末尾の「学生の自習時間の確保」において「自習時間の上昇傾向」という評価が記述されているが、どのような指導や取り組みによって上昇したのかの分析がほしいと思います。この上昇は、偶然かもしれません。

「学生の自習時間」（16 頁上段のグラフでは「予習・復習時間」となっていますが、他の委員からのご指摘があったように、表現としては「自習時間」あるいは「授業外学習時間」のほうがよいのでは？）確保の問題については、各教員がバラバラに対応すると支障をきたすところもあるので（過度の課題量になる恐れもあります）、どのような課題をどのような分量で出せば適切なのか、課題が出るからやるという受け身の姿勢をどう克服するのか、等々についての教員間の検討とあらましの共通理解が求められているのではないのでしょうか（受講者数が多いので発表など課題の活かし方も難しいですが）。

IV

総 括

総括

今回の3人の外部評価委員の先生方からいただいた講評をまとめると次のようになる。

霜田委員からの講評

1. 人間形成と思想部会のシラバスを見ると、各回の授業内容が書かれていないものが散見される。各回の授業内容が明記されたシラバスの徹底が必要である。
2. 成績評価基準に関して、成績評価に考慮するもの（試験、レポート等）を列記するだけでなく、それぞれが成績評価のどの程度を占めるのかについての比率が明記されていないものが散見され、成績評価の内訳・比率の明記を徹底する必要がある。
3. 大教室でもディスカッションなどを含めたアクティブ・ラーニングは可能であり、大教室授業でも一方通行の授業にならないような工夫が必要である。
4. 学生による授業評価がどのように翌年の授業の改善に確実に生かされるようなフィードバックシステムの構築が必要である。
5. 教員相互のピアレビューについても、その結果を授業に確実に生かすような相互評価システムの構築が必要である。

瀧上委員からの講評

1. クォーター制度に以降したばかりということであり、このタイミングでの評価は難しい。むしろ、クォーター制度がひとまわりした時点で評価を行うべきである。
2. シラバスについては、より具体的で詳細なものにしていく必要がある。
3. クォーター制度にしたメリットとデメリットを踏まえて、メリットを生かすようなシステムが必要である。
4. 少人数教育の可能性を考えるよりも、大教室で実施可能なアクティブ・ラーニングの可能性を検討していく方が生産的であろう。
5. 目標の可視化は共通シラバス等により達成されつつあると考えるが、評価も共通テストのような形で、より踏み込んだ目標達成をはかるシステムが必要である。
6. 学生の自習時間の確保は引き続き検討が必要である。

久保委員からの講評

1. 学生による授業評価は数値だけを見るのではなく、学生が授業を通じてどのように伸びたかを具体的に測るような内容が必要である。
2. 授業評価アンケートでは、学生自身にも取り組みを振り返ってもらったほうがよい。
3. 自習時間の変化の背後にある理由についてよく検討し、本当に上昇トレンドであればそれを継続するために何が必要かを明らかにしなければならない。
4. 大教室で実施可能なアクティブ・ラーニングについても検討が必要である。

人間形成と思想部会の外部評価では、全学的に取り組むべき問題点・課題が明らかになった。例えば、シラバスに必要な情報が記載されていない場合があること、授業評価アンケートの利用に改善の余地があることは、人間形成と思想部会だけの問題ではなく、全学的な取り組みが必要となる事案である。これについては、近田実行委員から、全学的にシラバスの作成についての研修をもち対応していること、学生が自己の学びを毎学期振り返るシステムを全学的に導入したことが報告された。

また、大教室での授業を中心とした人間形成と思想部会に特有の問題として、大教室の授業であることとアクティブ・ラーニングの実現をどのように両立させるかが課題として挙げられた。これに対しては、大教室の授業の一部にグループ・ディスカッションを導入すること、授業外のアクティブ・ラーニングとして参考図書を紹介し、学生に自ら学んでもらうこと（その結果、授業外での自習時間も増やすこと）等が議論された。

今回の外部評価により明らかになった人間形成と思想部会の課題は大きく次の 6 点となる。

- ・ 授業評価アンケート結果を確実に授業改善につなげるシステムの構築が必要。
- ・ ピアレビューの結果を授業改善につなげるためのフィードバックシステムの構築が必要。
- ・ クォーター制度のメリット・デメリットを把握し、デメリットを抑え、メリットを伸ばす努力が必要。
- ・ 授業目標を確実に達成するための工夫が必要。
- ・ 大教室授業でのアクティブ・ラーニングの実施。
- ・ 学生の自習時間を増やす工夫が必要。

外部評価を終え、クォーター制度に移行後の人間形成と思想部会の課題が見えてきたと考える。具体的には、授業改善のために既存のシステムをよりよく利用するためのシステムが必要ということ、大教室だからといって一方通行の授業をしていては時代遅れになるということであろう。その一方で、前回の外部評価で指摘された授業内容の重複を避ける必要があるという課題は、クォーター制度への移行にあわせて大幅な科目の整理を行い、改善がみられるとの評価をいただいた。今後は、クォーター制度という新しい枠組みの中で、今回新たに明らかになった課題の解決につとめていきたい。